

[連載] 第47回 清々しき人々 月尾嘉男 (東京大学名誉教授・工学博士)

生涯に10万體以上の仏像を彫刻した 円空



円空 (1632-95) 著「飛脚千光寺」所蔵

素朴な仏像に 驚愕の値段

二〇一六年九月二〇日に放送されたテレビ東京の名物番組「開運なんでも鑑定団」の番組舞台に大小様々な六〇体の木彫りの仏像が設置され、鑑定を受けることになりました。期待した値段は一五〇〇万円であり、会場は騒然となりました。騒然となった理由は素人が制作したような造像でもはれていない、異常な仏像ばかりだからです。この仏像の作者は円空という名前の江戸時代前期の僧侶ですが、今回はこの円空を紹介しましょう。

現在ではインターネット・オークションに多数の仏像が出品されているほど円空の仏像は人気があります。これは最近のことです。図1「二〇〇三年に東京国立博物館で大規模な展覧会が開催されましたが、一般の人々に円空が紹介されたのは一九五〇年代以後で、五七年一月に岐阜県立図書館で開催さ

図1 円空の仏像

生涯に二万體を彫刻

江戸時代後期の歌人の伴蒿録が一七九〇年に出版した「歌世跡 円空伝」(図2)には、江戸初期の陽明学者である中江藤樹や本草学者である貝原益軒と著名な人物九〇余名とも記が紹介されており、江戸時代には、それなりに知られた人物のようでした。それ以外に名古屋市にある寺院観音寺の住職が江戸末期に「浄海報記」に円空についての記載がありますが、ほとんど記録のない人物です。

長良川流域に誕生

この円空は「近世職人伝」(図3)から推定すると、一六三二(寛永九年)に美濃国竹が鼻(現在岐阜県羽島市竹が鼻)に誕生したという見解が有力です。それ以外に、美濃八幡や美濃国中郡など長良川沿いや美濃国郡上郡という記録も存在します。しかし岐阜県下呂市の業師堂の木札に生誕場所が竹が鼻と記載され、岐阜県高山市の千光寺に保存されている「円空上人肖像」にも同様の記載があるので、竹が鼻が有力とされています。図4



図2 江戸時代人伝(一六三〇)の円空肖像



図3 光寺観音寺

このように出生も明確ではないですが、竹が鼻に生誕したという詳細は不明です。しかし、円空の木彫りの仏像は木竹の性質を的確に表現した彫刻の天才と知られ、木材に因縁する仕事を生業とする家柄に誕生したとは良いことと推察され、そこから長良川流域の地名が生業の場所として浮上ります。長良川を岐阜県郡上市にある大日川岳を源流とし、急峻な山道を急流として下降し、岐阜県羽島市の一帯

茶ばなし残香 二百五十八話 外山道比古 展望社

朝倉書店 郷土史大系 観光・娯楽・スポーツ 生活・流通 情報文化

有斐閣 法学を学ぶのはなぜ? 気負ったら法学部にならないための法学入門

図4 岐阜羽島駅前にある円空記念碑



眼前の津軽海峡を横断して蝦夷

たと記載されています。この行動には母舅の不幸が影響しているからかもしれません。異説では誕生した土地の寺院に入りし補役をしながら修行し、付近の伊吹山中で、加賀山本で山岳修行を喫、三白山になった一六六六年に土地の寺院「得度(出家すること)とされた

図5 長良川(関市駅)瀬貫付近



へ入国することを希望します。当時の蝦夷への入国は空変に厳重で、各藩発行の証書(蝦夷での身分引受の人間が必要)で、それらのない円空がどのようにして蝦夷へ渡航できたか不明ですが、一六六六年四月から五月にかけて渡航している。そして実際に円空が蝦夷に滞在していた証拠があります。当時の蝦夷南部は松前藩支配下で、筆頭家老の蠣崎威左衛門が、筆頭家老の蠣崎威左衛門の作品とされる仏像が奉納されていたので、これは現地で作像したもので、これは現地で作像したもので、松前で作像した仏像が輸送されたものですが、円空は六月が七月にかけ、渡島半島の各地を修行しながら、仏像を制作し、最後は河津郡の河津湖観音島にある普光寺の地に参進して仏像を制作しています。この仏像について、約一〇〇年後、東北から蝦夷を旅行した菅江良澄が「蝦夷之手抄」に記録しています。それ以外の仏像についても「まみしのさへき」に詳しく述べています。このように、蝦夷南部には円空による多数の仏像が存在しています。また、明治初期の歴史資料運動によって、多数が渡島半島の太田権現(図7)の岩窟内部の

図6 千光寺(岐阜県高山市)



に設置されていた多数の仏像が火災で全焼するなど、事故があり、現在、北海道には約五〇体が残存しているのみです。円空の仏像は斧や鋸で彫削された表情が特徴とされ、この表現には彫を多用した精緻な仕上げになっています。

図7 大田権現(北海道せたな町)



六七四年に三重県志摩市片田の三蔵寺の「大般若経」の補修をするという多彩な活動をしていること。一六八〇年からは関東地方に修行に出発し、茨城県大間市月岩寺には御土地明神像(八八、一〇八、一八二)に、栃木県日光寺(八二)に、さらに東海地方に回帰し、長野県南木曾町の等々寺には舟付天像(八六)、滋賀県米原市の大平等寺には十一面観音像(八九)、岐阜県関市の高野神社には十一面観音像(九二)など次々と仏像を制作して行きます。そして六四歳になった一六九五年に生涯の土地である長良川畔で入定しました。

蝦夷の渡島半島に足跡

山岳修行を終了した一六六五年、三歳になった円空は全国を巡回する長旅に出発し、最初に秋田に到着して日本海沿いに北上し、各地で仏像を彫刻しながら津軽に到着します。ところが、当時の津軽には必須の入国鑑札も保せず、粗末な服装で彫刻道具のみ携行して、円空は役人を信用されず津軽からの退去を命じられました。そこで仕方なく首途に移動し、

東海地方中心に仏像を制作

それ以後に円空の名前が登場する。徳川家康の九男で登場張藩の初代藩主となる徳川義直の御用医師で、明国から帰化した張振市が一六六九年に名古屋市中心に建立した寺院の住持も、市千種区内に建立した寺院の住持も、徳川家康といわれる徳川家の室内に安置されている十二神将日光菩薩像、月菩薩像の各像を円空が制作したことです。鈍一本で制作したことが、これによれば蝦夷を訪問してから三年して郷里に帰還したことにちなみ、一六七一年には親堂の土地とされる岐阜県羽島市に親堂堂を建立して母親の三三回忌の供養を行っています。以後、四八歳になる一六七九年までは、岐阜県郡上市の黒地神社、郡上市市中村区の土屋親善寺、名古屋市東区の熊野神社のために仏像を制作するなど東海地方を中心に活躍していますが、特筆すべきは

仏像から精神を見出す

円空の本影の仏像は鈍一本で制作した一刀彫り、一気に仕上げた荒技のように理解されていますが、最初は鋸で彫削しているにも、多数の彫刻刀を駆使して仕上げられており、偶然の形態ではなく、緻密に計算された作品です。円空仏師の土屋重義は「円空の彫刻(九〇)で、飛鳥時代の仏像の影響があるものの、既存の形式を打破、独自の世界を提示し、近代美術の歴史において現代感覚に直結する造形である」と絶賛しています。戦後、円空の仏像は芸術作品として評価され、売買さされることが多くなり、戦前から民衆の生活日用品を評価する民芸運動が

つぎお よしお

1942年名古屋生まれ。1965年東京大学工学部卒業。工学博士。名古屋大教授、東京大学教授などを経て、東京大学名誉教授。2002、03年総務省総務審議官、これまでコンピュータ・グラフィック、人工知能、仮想現実、メディア政策などを研究。全国各地の大学でフェロウとしてリサーチをしながら、知床半島、羊蹄山、富良野、釧路、北海道を主に、地域文化や海外に目を向け、環境保護や地域計画に有志と協力。主要著作「日本百年の転機論(一) 講談社」、縮小文明の歴史(一) 東京大学出版会、「地球共生」講談社、「地球の救い方」永野の語(遊行社)、「1000年先を読む」モロゾシ研究(所)「先住民族の創習(遊行社)」「誰も言わなかった日本史上最もビッグデータとサイバー戦争のカタクリ」アスコム、日本が世界地図から消滅しないための戦略「新出版社」幸福実感社会への救済(モロゾシ研究所)「転換日本 地域創成の展望」東京大学出版会、「遊行社」は「清々々々々々々」遊行社



つぎお よしお

1月号 令和3年1月7日発行
●編集 モルゲン編集部
●発行 (株)遊行社 ●印刷 北日本印刷(株)
〒160-0008 東京都新宿区四谷三軒町5-5-1F
TEL 03-5361-3255 FAX 03-5361-1155
HP http://yuyosha.web.fc2.com/
MAIL morgem@vesta.ocn.ne.jp
●配布エリア
・高等学校(全国)
・中学校(北海道/岩手/宮城/福島/群馬/栃木/茨城/埼玉/東京/千葉/神奈川/長野/新潟/山梨/富山/石川/福井/岡山/広島/香川/愛媛/高知/佐賀/長崎/大分/熊本/沖縄)
・朝の読書実施校(全国中・高等学校)
・大学・短大・専門学校・サポート校、公共図書館の一部
●月刊紙(毎月1回発行) ※7・8月は合併号
●定価 年間購読料3,300円(300円×11回)
※一部売り500円(価格はすべて税別)

編集後記

あけましておめでとうございます。

昨年ダイヤモンド・プリンセス号から始まったコロナウイルスは、瞬く間に私たちの日常生活を奪い、日々当たり前であった生活そのものを奪ってしまいました。
当然のこととしてオリンピックは1年、期間限定の延期を余儀なくされ、そして社会参加へのスタート台に立った子どもたち新小学一年生も行き場を失った。
厳しい試練を乗り越えて入学できたものいまでも大学に通うことができず、授業は一人部

屋でパソコンを見つめる学生たち。孤独な学生生活は友人も作ることもできない状況だ。
ほどなくして、小学校から高校生活までは緊急事態宣言後授業が再開され、学校生活は戻ったものの、集団で行う行事はほとんど中止に追い込まれてしまった。甲子園野球も例外ではなかった。甲子園を夢見て、あるいは甲子園からプロへの道を思い描いていた選手もいたことだろう。夢にかけた者へのあまりの過酷な状況に、甲子園野球の代表が用意され、一枚一試合をすること夢は終わりを告げた。

目の前でさまざまなものが脆く崩れ去ってゆくこの現実。コロナで奪われた夢や希望はどこへ行ってしまったのか。その先は何処へ向かえばいいのだろうか。しばし言葉が失ってしまふ。戦うことのできない敵への無力感。世界中の人々誰もが思い知ったこの一年だった。
立ちつづいた年は明け、新しい2021年の始まりだ。何か動き出す予感を感じながら、待とう新しい希望が生まれることを、そしてそれは必ずやって来ることを信じて、いや必ずやって来るのだから。(H)